

(東京)ノ記載ニ據ルト淋菌性横痃中ニ淋菌ヲ發見スルコト稍々困難デアルトセラレテ居ル、淋菌性横痃ノ診断ハ必ズ尿道淋ガアルノデ診断シ得ルト言フノデアル。ソレデアルカラ本症例ノ如ク尿道淋が發見サレナイデ、而モ緩慢ナ経過ヲトレバ、細菌學的検査ノ粗漏ナ場合ニハフライ氏反應陰性ノ第四性病トセラレル危險ガ多分ニアルノデアル。此ハ如何ナル程度ノ細菌學的検査ヲ根據トシテ居ルノデアルカ今直チニ知ルコトガ出來ナイガ、第四性病ハフライ氏反應ガ陰性デアル場合ガ屢々アルト言ハレテ居ル事實ト照合シテ考ヘテ示唆ニ富ムモノデハナイカト考ヘラレルノデアル。

臨床診斷ト手術所見

胃癌末期ニ現ハレタル限局性漿液性脳膜炎

荒木千里 (京都外科集談會昭和13年12月例會所演)

患者：谷○喜○郎、38歳、男子

既往症：1年前胃癌ノ爲當外科ニテ胃腸吻合術ヲ受ク。

現病歴：約1ヶ月前ヨリ激シキ頭痛アリ。最初ハ後頭部ノ疼痛ナリシモヤガテ頭部全體ニ亘ル頭痛トナリタリ。同時ニ時折嘔吐ヲ來ス事アリ。其後頭痛ハ益々激烈トナリ爲ニ睡眠モ充分取ル事能ハズ。約3週前突然全身痙攣ヲ來シ約10分間持續、其間意識ヲ喪失セリ。斯ル全身痙攣ハ引續キ2-3日間毎日現ハレタリ。其頃ヨリ口渴強ク尿增加シ、又兩眼ノ突出セルニ乍付ケリ。尙兩眼ノ視力ガ急激ニ減弱シ最近ハ殆ンド全ク失明ス。同時ニ四肢ガ無力トナリ起坐不能ニ陥ル。最近項部ニ鈍痛アリ。頭部ヲ背轉位ニ置ケバコノ疼痛ハ輕減ス。

現症：著シク羸瘦衰弱シ高度ノ惡液質ニ陥レル患者。心窓部ニ約手拳大ノ彈性硬、表面凸凹アル腫瘍ヲ觸ル。即チ前年手術ニテ確メラレタル胃癌ナリ。腹部ハ一般ニ膨隆シ腹水アリ。既ニ胃癌ノ末期ニアル患者ナリ。激シキ頭痛ノ爲ニ苦悶ノ狀著シク、診察モ數回ニワケテ行フ必要アル位ナリ。神經學的所見トシテ主ナルモノハ、1) 項部強直、2) 兩側喰覺障礙、3) 兩眼球突出。兩眼トモ殆ンド視力ナシ。高度ノ鬱血乳頭(4-5D)アリ。4) 他覺的ニ眼球運動ハ全體トシテ特ニ外方及ビ上方ニ向ツテ障礙セラレ、自覺的ニハ複視ヲ訴フ。水平性(右方ハ著明)及ビ上方ニ向フ眼球震盪アリ。5) 輕度ノ發音障礙アリ。舌尖ハ右へ傾ク。6) 四肢ハ無力性(hypotonisch)ニシテ起坐不能、小腦性失調諸症狀著明。7) スベテノ腱反射ハ著明ニ低下乃至消失。異常反射ナシ。

要之高度ノ脳壓亢進ト小脳及ビ其附近ノ脳神經症狀ガ主デアル。夫ニ眼球突出、崩尿症、兩側喰覺障礙等 Hypothalamus 及ビ其附近ノ病變ヲ思ハシムル症狀ガ加ツテキル。斯カル症候群ニ對シテ小脳腫瘍ト第三脳室底部腫瘍ノ2ツガ同時ニ存在スルト考ヘルノハ面白クナク、統一的ナ診斷トシテハ先づ小脳腫瘍(多少右寄リ)ガアリ、其結果タル脳水腫ノ爲ニ第三脳室ガ強ク擴大セラレ、之ニヨツテ Hypothalamus 及ビ其附近ノ壓迫症狀ヲ來シタルモノト強ヒテ解釋シタノデアツタ。腫瘍トシテハ胃癌ガ現存スル關係上當然癌腫ノ脳轉移ヲ考ヘタ。

併シ以上ノ局所診斷ニハ尙少カラ又疑問ガアルノデ Ventrikulographie ヲ行ツタ。ソレニヨルト兩側脳室(特ニ右)ハ輕度ニ擴大シ右側ヘ向ツテ移動シテ居ル。併シ側脳室ノ形狀ニ異常ナク、又缺損部ヲモ認メナイ。第三脳室ハ現出サレテ居ナイ。

一般ニ脳腫瘍デ側脳室ガ一方ヘ移動シテ居ル際ニハ、腫瘍側ヨリ健康側ヘ向ツテ移動シ、而モ腫瘍側ノ側脳室ハ健側ノ方ヨリモ小サイノガ普通デアル。此例ノ如ク擴大セル脳室ガ他側ヘ向ツテ移動スルト云フ事ハ、第三脳室腫瘍デ一側ノモンロー氏孔ガ閉塞サレテ居ル場合以外ニハアリ得ナイ。從ツテ本例デハ癌腫ノ第三脳室轉移ト診斷シタ。

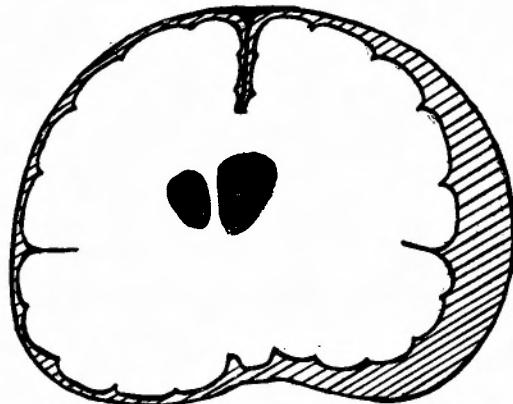
斯クノ如キ胃癌末期患者ノ脳轉移ニ向ツテ手術ヲ行フベキカ否カハ一般ニハヤツテモ無意味ナ場合ガ多イ。併シ本例デハ頭痛ガアマリニモ激烈デ鎮痛剤モ全ク奏效セズ、患者自身ガ苦シムノミナラズ、患者周囲ノ人モ醫師モ見ルニ見兼ネタ。從ツテ骨盤臓器癌末期患者ノ激シイ疼痛ニ對スル脊髓前側索切斷ト同ジ意味ニ於テ減壓手術ヲ行フ事トシタ。

手術：(昭和13年22/X)。右側顎顎筋下減壓術。硬膜ヲ開イテ驚イタ事ハ圖ノ如ク Fissura Sylvii ヲ中心トシテ蜘蛛膜下腔ニ異常ニ大量(多分100cc、少クトモ50cc以上)ノ脳脊髄液滲溜シテ居タ事デアツタ。軟腦膜表面ニハ癌腫轉移ヲ認メナイカラ、之ハ所謂限局性漿液性脳膜炎ノ所見ニ相當スル。但シ蜘蛛膜ハ僅ニ肥厚シテ居ル程度ノ變化ニ過ギナイ。

一般ニ脳腫瘍デハ腫瘍周囲ノ脳組織ニ多少トモ浮腫ガアル。之ハ癌腫ノ脳轉移ニ於テ特ニ著明デアル。從ツテ脳ノ表面ハ脳容積増大ノ結果トシテ硬膜内面ニレピツタリノ抑シツケラレテ居リ、其間ニ脳脊髄液滲溜ノ餘地ハ極メテ僅ニ過ギナイ。之ハ脳内水腫ノ存在スル際ニハ特ニ著明デアル。從ツテ本例デハ以上ノ如キ蜘蛛膜下脳脊髄液大量滲溜ノ所見ヨリ脳腫瘍ノ存在ハ除外出來ル。單ナル限局性漿液性脳膜炎ナノデアル。今コノ所見ト Ventrikulogramm トヲ對比スルニ側脳室ノ左方移動ノアツタコトハ極メテ當然デアル。併シ之ヲ以テ右側側脳室ノ擴大ヲ説明スルコトハ出來ナイ。ソレニハ矢張リ右モンロー氏孔ノ通過障礙多分炎症性癒着ヲ考フベキデアラウト思フ。

術後經過：頭痛消失、視力恢復、四肢ノ筋力恢復、失調症狀消失、眼球突出輕快等患者ノ苦痛ハ著シク輕減シタ。併シ胃癌ニヨル惡液質ガ増悪シ、腹水ノ滲溜ガ加ハリ、衰弱ガ進ミ、術後1ヶ月ニシテ苦痛少ク死亡シタ。死後手術部骨缺損部ヨリ脳ノ剔出ヲ行ヒ脳ニ癌轉移ナキコトヲ確認シ、本例ガ純然タル限局性漿液性脳膜炎ナルコトヲ確メルコトヲ得タ。

思フニ本例デハ單ニ右 Fissura Sylvii ヲ中心トスル大脳表面ノミナラズ、恐ラク脳底ノ Cisterna ニモ大量ノ脳脊髄液滲溜ガアツタデアラウト考ヘル。Hypothalamus 附近ノ症狀、小脳附近ノ症狀ト恩ハレタ一切ノ症狀ハ之等ノ大量ニ滲溜シタ脳脊髄液ノ壓迫ニヨツテ起ツタモノト考ヘラレル。偶々末期胃癌患者ニ現ハレタルガ故ニ、術前全ク豫期シナカツタ意外ノ變化ダツタニデアル。



嵌頓ヘルニアト誤ラレタル汎発性腹膜炎

新 美 陸 世 (京都外科集談會昭和13年10月例會所演)

患者：22歳、女子

主訴：左鼠蹊部ノ有痛性腫瘤及ビ腹痛

既往歴：患者ハ生來左鼠蹊ヘルニアヲ罹患シ、長時間ノ歩行、腹壓ニヨツテ膨大シ、靜臥又ハ指壓ニヨリ消失スルノヲ常トシタ。入院ノ3日前分娩アリ、3日前放尿ニ際シテ尿道ニ灼熱感ヲ來シ、同時ニ腹部全體ニ亘ル極度ノ腹痛ヲ來シタガ放置シテ居タ。帶下ハ黃色粘稠。

現病歴：約24時間前洗濯左鼠蹊部ニ突然有痛性腫瘤ヲ來シ、指壓ニヨリ消失セズ。11時間後ニハ腹痛ハ強度トナリ痛疽様ニシテ、注射ヲ受ケテモ一時輕快スル程度ノモノデ有リ、背部ニ放散ス。2時間前ヨリ恶心ヲ來シタガ、嘔吐ナシ。發熱感アリ。

現症：一般所見：體格榮養中等度、顔貌著シク苦惱狀、蒼白、脈搏1分時約100、緊張稍々弱、整正。體溫38.5°C、心尖ニ輕度ノ收縮期性雜音ヲ聽キ、心機昂進、肺臟ニ變化ナシ。

腹部所見：一般ニ陷没、膨滿共ニナク視診上認ムベキ變化ナシ。觸診スルニ瀰漫性ニ腹壁緊張抵抗有リ。Blumberg 氏症狀著明、Rosenstein 氏症狀、McBurney 氏點ノ壓痛ハ不明、腸雜音ハカスカニシテ、右脚ノ運動障礙ハ認メラレズ。左鼠蹊部 Pouparti 氏靭帶ノ上側方ニ鷄卵大ノ腫瘤アリ、表面平滑ニシテ發赤ナク境界不鮮明、異常ナル靜脈怒張、搏動性運動、蠕動不穩等ヲ認メズ。境界ハ下方ニハ比較的鮮明、上方ニハ不鮮明、彈性硬、壓痛有リ、腹壓ヲ加ヘシムルモ變化セズ、透照試驗陰性。濁音ヲ示シ腸雜音ヲ聽カズ。經肛指診ヲ認ムベキ變化ナシ。

血液所見：赤血球543萬、白血球15200、ヘモグロビン含有量76%（ザーリ）、中性多核白血球82%。

尿所見：蛋白反應ハズルオ陽性、ソノ他陰性。糖（-）、尿中大腸菌ハ直接ニモ培養上ニモ證明セラレズ。

臨床診斷：嵌頓ヘルニア及ビソレニ歎發セル汎発性腹膜炎。

手術：ヘルニア囊ハ鷄卵大ニ腫張シ、彈性硬、實質性ノ感アリ、表面毛細血管充盈ス。之ヲ開クニ先端ハソノ壁極メテ肥厚シ約1.5釐ニ及ブ。腹腔中ヨリ極メテ粘稠ナル灰白黃色ノ膿汁約12耗ヲ排出ス。ヘルニア門ヨリ腹腔中ヲ指診スルニ、子宮ハ稍々肥大セルモ殆ド異常ナシ。左卵巣、喇叭管ヲヘルニア門外ニ引き出シテ検スルニ、卵巣ニハ輕度ノ充血、浮腫アリ。喇叭管ハ肥大シ、充血、浮腫強ク周圍ニ粘稠黃色ノ膿ヲ附ス。以上ノ所見ヨリ化膿性喇叭管炎ニ歎發セル汎発性腹膜炎ガ考ヘラレタルヲ以テ更ニ廻盲部ヲ切開スルニ、蟲様垂ニ著變ヲ認メズ。右卵巣、喇叭管ノ變化ハ左ノソレト全ク同様デアルガ、卵巣ニハ一面ニ膿ノ附着アリ。喇叭管ヨリ黃色濃厚ナル膿ヲ流出ス。蟲様突起切除術ヲ行ヒ、小骨盤腔内ニ排膿管ヲ挿入ヘルニアニハ根治手術（波多腰氏法）ヲ行フ。

體：培養上菌ヲ證明シ得ズ。鏡檢上白血球中ニ喰蟲セラレタル淋菌ヲ多數證明ス。

術後ノ經過ハ良好。

考察：婦人ニ於テ分娩後ニ淋菌ノ活動ガ旺トナリ、元來アツタ慢性子宮内膜炎等ヨリ更ニ喇叭管炎、卵巣炎ヲ來シ淋菌性腹膜炎ヲ起スコトハ稀デハナイ。一般ニ腹壁ハヘルニア外壁ニ比シテ厚ク、腹腔内炎症所見ガ未だ外部ヨリ認メラレザル以前ニ、ヘルニア門部ニハ早期ニ且強度ニ發現スルガ故ニヘルニアノ嵌頓ト誤レルコトアリ。之レガ Clairmont 氏偽嵌頓デアツテ、即チコノ際ニハ詳シイ病歴ガ甚ダ重要ナル價値アリ、特ニ婦人ノ腹部疾患ニ際シテハ、必ズ内生殖器疾患ヲモ考ヘル必要ガアル。曾テ（昭和9年）本會席上ニ於テ鬼束博士ニヨリ同様ノ例ガ男子外鼠蹊ヘルニアニ關シテ報告サレテ居ル。